



「気軽に話しに来てくださいね」と笹川さん

輝いています

ひと

白杖を持ったナース

ささ がわ しず こ
笹川 静子 さん

困難を乗り越え支える人に

「障害があっても自分らしく、人の役に立ちたい」。笹川静子さん（62歳・塚越7丁目）は、視覚障害がありながらもその経験を生かし、さまざまなボランティア活動を行っています。

看護師として病院や看護学校で働いてきた笹川さんですが、進行性の難病で視力が低下し、仕事を続けられなくなりました。視力が奪われていく絶望の中で、同じ看護師として働く娘から掛けられた「一番尊敬している看護師は、お母さんだよ」との言葉に勇気づけられ、「目が見えなくてもできることがあるはず」と自分を奮い立たせました。

視力が低下して一番困った

のは、情報を取得すること。受けられるサービスが分からず、もどかしい思いをしました。そんな思いをする人を減らそうと、情報共有の場を増やすことに力を注ぎます。患者会で医療情報を共有し、また視覚リハビリ訓練施設で出会った仲間と作ったサークルでは、ヨガや手料理を楽しみながら、気軽に情報交換できる場を提供しています。

更に看護師の経験を生かして、公民館で健康相談を受ける活動に参加すると、評判を耳にした視覚障害のあるかが笹川さんを訪れるように。訓練施設で学んだ白杖の使い方や同行援護のサービスなどを伝えると「出かける機会が増えました」と喜ばれ、やりがいを感じています。

活動は更に広がり、今月16日には南公民館で視覚障害をテーマに、訪れた人と気軽に話をするイベントを開催予定です（15分情報ダイヤル参照）。「活動を支えてくれる人への感謝の気持ちを忘れず、私も誰かを支えることができたらうれしい」と笹川さん。彼女の明るく生きる姿は、これからも多くの人を励まし、勇気づけていくことでしょう。

今月の河鍋晩斎記念美術館

天才絵師の作品 蔵にあり

—No.103—



晩斎筆・秋月種樹賛
「天狗集会之図」
紙本墨画淡彩 軸装

幕末から明治前半の政治家・秋月種樹が「山公自是林園主」と書いた掛軸を、天狗たちが見上げ、批評し合っています。その軸が掛けられているのは、何と天狗の鼻。天狗は木の洞から顔を出し、苦しい表情で、下の様子を見えています。

本図は天狗たちを晩斎が描き、秋月が書を認めて合筆しています。自分のことを棚に上げて他人を評価する人々の自信過剰ぶりを、「天狗になる」という慣用句になぞらえ、天狗たちが品評をしている姿で表現した、晩斎の強烈な風刺画です。

河鍋晩斎記念美術館 開催中（23日まで）

企画展「画鬼晩斎 妖怪画コレクション」展
同時開催 特別展「『晩斎酔画』の世界」展

開館＝午前10時～午後4時 ところ＝南町4-36-4
休館＝火・木曜日、24日～1月3日
入館料＝一般600円 高校生・大学生500円 小・中学生300円
65歳以上500円

※65歳以上の人は年齢の分かる物、学生は学生証をご提示ください

詳細＝同館（☎441・9780）



展覧会の詳しい内容は
美術館のホームページ
を御覧ください



yosai
Kawanabe

現在の茨城県古河市に生まれる。浮世絵や狩野派を学び、江戸・東京の庶民から人気を博す。明治9年、万国博覧会に肉筆画を出品。14年、内国勸業博覧会で日本画の最高賞受賞。娘の晩翠も日本画家。



かわなべ きょうさい
河鍋 晩斎
天保2年（1831）
～明治22年（1889）